○フサナリタコノキについて（山崎　敬）Takasi YAMAZAKI: On *Pandanus furusei* Hatusima

小笠原の固有種として1977年に発表されたフサナリタコノキは，扇浦の基準株の他に中央山から夜明山にかけて野生があり，また大村と奥村の民家に数本植えられているといわれる（古瀬氏談；豊田武司，小笠原の植物：297，1981）。長さ 10 cm ほどの集合果が10個ほど密集して房を作る，変わったタコノキ属の植物である。

1985年 1 月に小笠原を訪れる機会があったので，国立林業試験場の豊田武司氏と共に，中央山から夜明山にかけてかなり探したが見付けることができなかった。小笠原高校の安井隆弥氏も注意しているが原木以外は見付からないという。大村，奥村にあるというのは観賞用に栽培されているアカタコノキ *P. utilis* Bory ではないかと思われる。これは雄株と雌株が数本あり，現在増殖がはかられている。結局フサナリタコノキは扇浦にある 1 株だけのようである。

扇浦のものは高さ 7-8 m の雌株で，直立して上部で数回二分岐する。果実はよく成長するが，種子はできないようである。沢ぎわの崖の斜面にはえているので，採集するのは困難であるが，安井氏の尽力で葉と果実を入手することができた。

生育場所は，戦前に麻生末吉氏が農園の経営をしていた所である。安井氏が生前の麻生氏に面識のある田中斉一郎氏（現小笠原村教育長）の話を伺った所によると，麻生氏は松戸園芸を卒業後，大正末期に父島で園芸を始め，ラン・ヤシ・ドラセナなど多くの熱帯の観賞植物を手がけ，昭和14年頃は扇村村長を務めるほど父島で活動をされた方だという。今でもここに旅人木の大木などいくつかの観賞植物が残っている。扇浦のフサナリタコノキは，麻生氏が輸入して栽培していたものと考えるのが妥当と思われる。

輸入したものだとするとこの学名が問題になる。しかしタコキノ属は世界の熱帯に広く分布し，600種ほどあるといわれる。Stone (Engl. Bot. Jahrb. **94**: 459, 1974) は 8 亜属57節に分類している。入手した標本の葉は昨年の台風で傷められ，重要な先端部の形がわからない。こういったことで，正規にこの学名をさがしても，資料の少ない日本では不可能に近い。フサナリタコノキにかねて関心を持っておられたアボック社の毛藤圀彦氏は，見事な果実のカラー写真と 1 個の集合果を提供して下さった。それと同時に，小笠原の植物生態を研究している駒沢大学の清水善和氏が，フサナリタコノキはマダガスカル産の *P. centrifugalis* St. John によく似ていると言っていることを知らせて下さり，文献のコピーを送って下さった。

フサナリタコノキはアダンやタコノキと異なる，非常に特徴のある形をしている。集合果が房になってつくこともその一つだが，このような形のものは初島氏も述べているようにミクロネシアのものに見られる。最も特徴的なのは小核果である。小核果は 3 角状倒卵形で 4-6 稜があり，先は平らかややへこみ，4-6 個の無柄の馬蹄形の柱頭がへこみの周りに並んでいる。小核果は 4-6 室である。このような形のものは房状の集合果を

もつミクロネシアのものには見られず，アフリカ，マダカスカルに分布する Dauphinensia 節に入ると思われる。初島氏はフサナリタコノキを発表する際に Keuria 節（現在は Pandanus 節の異名）に属するものとされたが，Keuria 節はアダンやタコノキが属する群で，フサナリタコノキの所属とは異なる。

Dauphinensia 節は11種知られ，大部分がマダカスカル島産である。Stone (Bot. J. Linn. Soc. **63**: 112, 1970) はもっと少数の種類にまとめられるべきだという。このうちフサナリタコノキは *P. dauphinensis* Martelli (1951) や *P. centrifugalis* St. John (1968) によく似ている。St. John は両種の詳しい記載と特徴を示す正確な図を画いてくれている。それと比べると，フサナリタコノキは清水氏の考えどうり *P. centrifugalis* に最も似ている。葉の裏面中肋上の刺の間隔などは *P. dauphinensis* に近いが，全体として *P. centrifugalis* に似ている。Stone によれば *P. dauphinensis* と *P. centrifugalis* とは区別が困難であるという。前者はマダカスカル島の東南部で，後者は北東部から書かれたもので，同一種類であっても，地理的な変異があるのかもしれない。その辺のことはいづれ誰かが明らかにしてくれるだろう。今の所フサナリタコノキは *P. centrifugalis* にあてておいてよいと思う。Dauphinensia 節の植物は葉の基部が急に広くひろがるのが特徴とされている。フサナリタコノキの手もとにある標本は不充分で，その所が明らかでない。標本がよくないのか，フサナリタコノキは葉の基部があまり広がらないのか，今後確めなければならない点である。

問題を混乱させないため今まで雌株のことだけ述べた。ところが初島氏の原記載は雄株も書かれているのである。フサナリタコノキの雄株は，原記載のもとになった標本を採集された古瀬氏のほかに誰も見ていないようである。原記載では雌株は野生のものと考え，雄株は栽培とことわってある。したがってこれは前記古瀬氏談にある「大村，奥村の民家に数本植えられている」の一つである可能性が強い。今まで調べた所では民家にあるのは総てアカタコノキ *P. utilis* Bory でフサナリタコノキらしいものは見付かっていない。

Stone の分類ではアカタコノキは Vinsonia 節に属し，フサナリタコノキの属する Dauphinensia 節とは同じ Vinsonia 亜属に入れられている。Warburg (Engl. Pflanzenreich 3 Heft, IV, **9**: 54-55, 1900) では両者とも Vinsonia 節に入れられている。両者はそう縁の遠くないものであるが，アカタコノキの集合果は大きな球形で1個だけが花序についていて房を作ることはない。Dauphinensia 節の雄花を記載した報告はあまりないので特徴がわからないが，Stone (1974) は Vinsonia 亜属の特徴に雄しべをあげているので，亜属全体としてかなり似た形をしているものと思われる。初島氏のフサナリタコノキの雄花の記述はアカタコノキの雄花の形としてもあまり違わないように見える。これがアカタコノキかどうかは基準標本を調べなければならないし，アカタコノキの資料も集める必要があるので結論はだせないが，今の所フサナリタコノキの雄株はアカタ

コノキの可能性が非常に強い。奥村にあった関係のありそうなアカタコノキの雄株は2本あった。安井氏の話ではその1本は亜熱帯農業センターに移されて，現在雌株の結実に使われているという。もう1本は昨年大村の公園に移され，一時弱っていたがどうやら活着したようである。フサナリタコノキの本体は雌株なので，雄株の結論は急ぐことはないが，フサナリタコノキの記述から雄株は除いた方がよいと思う。

日本でこの属を調べるのは非常に困難である。したがって充分な結論をだすのにはかなり時間がかかるので，不充分ではあるが中間報告をまとめておく。現地調査，標本の採集，文献などで御世話になった安井隆弥，豊田武司，毛藤圀彦の諸氏に厚く御礼申し上げます。

Pandanus centrifugalis St. John in Pacific Science **22**: 111, figs. 251-253 (1968).

Pandanus furusei Hatusima in Hokuriku Journ. Geobot. **25**: 2, figs. 1-3 (1977), pro parte, excl. male specimens, syn. nov.

Hab. Isls. Ogasawara, Is. Chichizima, Ōgiura (H. Murata, 1977, s.n.; T. Yasui et T. Yamazaki, Jan. 20, 1985, no. 4986; T. Yasui, March 14, 1985, no. 4900, 4902).

All the above specimens are femal and were collected from the type tree of *Pandanus furusei* which seems to have been cultivated. The male specimens used for the description of *Pandanus furusei* seem to be the same with *Pandanus utilis* Bory having been cultivated in Is. Chichizima, Isls. Bonin.

（東京大学 理学部付属植物園）

□野外植物研究会：**野草1-15巻（昭和10～42年）＋別巻**（復刻版）4500pp. 1985. 出版科学研究所，東京．¥54,000．檜山庫三氏らの創立になる野外植物研究会は，東京を中心とする小規模なアマチュア団体であるが，有能な指導者と熱心な幹事の運営で50余年にわたる活動を続けてきた。その会報の「野草」，「花の木」は単なる野外観察記録としてばかりでなく，分類学上の資料として参考にする研究者が少なくない。しかし何分部数が少なくてバックナンバーの入手は難しく，また謄写印刷のため印字が不鮮明な号もあり，とくに第二次大戦前後のものは紙質がわるくて判読に苦しむものが多かった。このたび復刻されたものをみると，あんなにきたない紙面からどうやって製版したのか，みちがえるようなできばえである。別巻には総目次と索引があるが，植物名索引はまだ増補の必要がありそうだ。フロラの変遷をたどるには過去の資料が必要であり，「野草」のような有力な資料が十分に利用されるようになったことは，うれしいことである。

（金井弘夫）